

鞍褥は燻し革か、史学者は肯定論を展開

— 皮革技術史上の課題ともいえる燻し技術 —

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

馬鞍第3号 (続き)

むながい
胸懸 [調査の結果]

【前号の、馬鞍各部の名称図を参考されたい。】牛革である。これも細長い革を袋状に縫い付けて帯にしたものである。帯状の形成と美観を整えるために加圧した線が二本見られる。その裏側には糸の痕があり、躰け糸の痕と思われる。鐙鞞と同様に、全面的に黄褐色を呈し、銀面も見られない。漆面はかなり剥落している。袋状の革を開いてみると、中の方は白っぽい。鞞し時の革の色相をかなり残していると考えられる。「黒の塗料は革の用途から考えると、漆ではなさそうだ。漆では屈曲に耐えられない」との見方が示されたが、これは他の紐状にして巻かれている黒塗りの革についても言えることである。すなわち、明らかに漆塗牛革の色調とは異なっていることから、特異な彩色・塗装である可能性がある。なお、装飾については、金具から見て舶来品であろうとの意見があった。一部には、鹿革の緒が巻き付けてあるが、かなり老化した状態を示している。

しりがい
尻懸 [調査の結果]

胸懸と同じ加工と革の状態である。牛革である。拡大写真では残毛が見られる。漆が染み込んだ穴の状態も認められる。

おもがい
面懸 [調査の結果]

胸懸や尻懸と同じ加工と革の状態であ

る。牛革であるが、乳頭層が消失し網状層が露出している。

はるび
腹帯 [調査の結果]

全体として前述と同様で、乳頭層消失によって露出した毛幹が観察される。牛革と見られる。

馬鞍 第4号 鞞 (したぐら)

資料：鞞=左・右 長55 表は白革・錦
裏は白緋

毎日新聞社刊『正倉院寶物』(1995～97)(本書を以下では『資料』と称する)によると「鞞は居木に結びつける革紐をもち、腹帯革を通す孔を穿つ。芯はおおむねむしろ筵、柏葉、麻布等を幾重にも重ねて作り、表には牛皮を皺加工した皺革に黒漆を塗ったものを貼るほか、紫色氈を重ねるものや、緑を錦で飾った海豹の皮を貼るものなどがある。」すなわち、今回の調査に供された馬鞍第7号は牛革、第3、4号はアザラシ皮が使われていた。

[調査の結果]

昭和の修理時に使用された生地がかなり広く見られ、古色付けされているので、観察に注意が必要である。元の素材は極めて薄い。写真左の右下辺りには乳頭層が僅かに残っている。全面に虫食いの跡があり、多くの部分に毛幹が観察され、銀面残存部では波形の毛穴の小山が並ぶ。さらに、1穴数本型の被毛で刺し毛と細毛が認められ

ることから、アザラシの毛皮と判断できる。鞆の右方には革の継ぎ足し部があり、その縫い目には三角針の跡が連なって残っているし、全体の周辺部の縫い目にも三角跡が散見される。皮が厚くて棒針では縫い合わせが困難であったと考えられる。しかし、この三角針の痕跡が鞆の一方の側に出ているということはないことから、アザラシ皮を縫い合わせるためにだけ三角針が使われたことが分かる。そして、これは鞆の構成部品を組み立てる状況を推察させる手掛りを与えていると思う。

馬鞍第5号 尾袋

資料：尾袋=尾袋長 麻布・革・黒漆塗
皺革しぼかわ

[調査の結果]

1号等の尾袋と対比し考察するために、本品を調査した。これは1枚しかないが、筒状に縫い合わせてあって整形されたままのものである。すなわち、2号及び3号の尾袋は各2点あって、いずれもすべて開いた状態で保管されている。つまり、縫糸が擦り切れて消失し、開いているのである。このため、開いた状態の尾袋はどのような形で用いられていたのか判然としなかった。しかし、本品によって筒状にして1尾について1尾袋を使うことが確かめられた。すなわち、従来2点1組のものかもしれないと考えられていたのだが、実はそうではないということが判明した。

本品は牛革である。僅かに銀面の脱落が見られるが、皺革で硬く、漆は艶消しで、亀甲状に割れて剥落が大きい。革は茶色を呈し、厚さはかなり不同で、部分的に残毛が認められるが、全体としては革作りの脱毛は良好と見られる。しかし、顕微鏡では漆が残る部分では残毛が比較的多く、その毛先には漆が残っている。漆のないところ

では虫害が酷く、ゼラチン化したような外観を呈している。牛革製では、漆塗りの尾袋は本品だけのようであり、貴重である。付属する緒は鹿革である。緒の結わえ方や尾袋の穴の通し方に独自の工夫が見られる。



馬鞍第5号尾袋 (調査報告書より)

馬鞍第6号 鞍褥 (くらじき)

資料：前後間の長37 表裏染革貼

『資料』によると、「鞍褥は鞍橋の座面に沿うように立体的に仕立てられる。裏面には鞍橋に固定するための紐が付く。氈せんや麻布などを芯とし、表には錦や文様を染め抜いた革を貼る。なお、第9号のみ、鞍褥を欠く。」とある。

[調査の結果]

裏面 鹿革であり、色づけは燻しではなく染料による柄付けと見られる。図柄は必ずしも正確な左右対称ではない。僅かなずれや部分的な変形も多い。白抜き部分と褐色部分との境は明瞭である。縫糸までが色分けされており、とても燻しの色とは考え難い。白抜き部は全体として窪んでおり、明らかに虫に食われたような窪みも見られる。紙型ではこれだけの細工は困難との見方もあるが、総合的にはステンシル法(型置き染め)で彩色したものと考えられる。

染色部は平坦で、防虫効果があったと考えられる。凸凹部や縫製糸周辺の着色の回り込みの様子などから、成形してから染めたものだろう。線維の細かさから鹿革と見られる。革は柔らかい。藁・麻布・柏葉が心材

に使われている。

表面 同様の観察結果である。



馬鞍第6号鞍褥 (平成15年正倉院展図録より)



馬鞍第6号履脊 (平成15年正倉院展図録より)

馬鞍第7号 鞍褥・鞆・履脊

資料：鞍褥 前後間の長40 表裏染革貼
鞆左・右 長49.5 表は黒漆塗皺革
裏は黒漆塗革
履脊^{なめ}上部長49.5 表は白繩〔しろあ
しぎぬ〕に染革の縁取

鞍褥 [調査の結果]

染料染めの鹿革である。『資料』写真の右方、すなわち、前方部の磨り減りが大きい。鹿革の一枚のものであり、極めて薄い。一見燻し染のように見えるが、細部の状態からステンシル法により着色したものと判断した。糸染めの山に染めの片寄りも見られ、革の白い部分は虫食いが激しい。事務所担当者からは、鞍褥の形にしてから型染めしたのではないかとの見解が示された。

鞆 [調査の結果]

牛革である。表側で艶消し漆の膜が剥落した部分の革はすべて黄茶色で、最表面の

銀面が失われ、乳頭層が露出している。この部分は線維構造も繊細であり、皺が他のものよりも浅く細かく、小牛革かもしれない。中心部に革の切れ目があり、茶色と白色の層が明らかに認められる。いままでの皺革は全層が黄茶色であったが、これは異なる。すなわち、漆に面した革の層が茶色に変色し、離れた部分では白っぽいのである。漆の革への影響を如実に示す、特筆すべき好例である。

全面に装飾のための線刻が入っている。漆を塗る前に加圧して線を入れたものと思われる。

裏面は牛革で、艶のある漆が用いられている。中ほど2箇所^{あしぎぬ}に緒が付いているが、鹿白革と見られる。緒の通る穴の部分に漆の剥落があり、革の網状層の組織が見える。鞆本体の漆は紫色系で、光沢があって牛革と見られる銀面模様が窺える。そして、乳頭層の一部が消失しており、毛幹が露出している。

履脊 『資料』によると「履脊は山折にして用い、腹帯革を通すための孔が穿たれる。芯はおおむね菴、柏葉、麻布等を幾重にも重ね、表を繩^{あしぎぬ}で覆い、縁および背に錦や染革を貼る。」とある。

[調査の結果]

材質は鹿革である。傷みがひどく、昭和修理の際、燻し革で補強されている。白い部分ほど虫に食われている。白糸・布にも燻しに似せた茶色が付着していることから、組み立て加工を終えてから染料で型染めをした可能性が大で、彩色はステンシル法と見られる。一見、燻し革のように見えるが、白と茶色の境が鮮明で、しかも境部分の滲みやみ出しの状態を考えると、染料染めであろう。この裏側でも、染料の型ずれや縫い糸の染斑も随所に認められた。

馬鞍第9号屨脊（なめ）

資料：上部長50.5 表は白緋[しろあしぎぬ]
に染革の縁取 裏は白緋 芯は麻布
ほか

[調査の結果]

傷みがひどく、昭和修理の際、燻し革で補強されている。使われている材質は鹿革と見られ、5つの部品が繋ぎ合わされている。周辺部はかなり磨り減っており、褪色もしている。白い部分ほど虫食いの程度が大きい。文様染については、組み立てて完成後にステンシル法で染めたものと見られる。白糸・布にも燻しに似せた茶色が付着しているし、裏側でも、染料の型ずれや縫い糸の染斑も随所に認められた。一見、燻し革のように見えるが、白と茶色の境が鮮明で、しかも境部分の滲みやはみ出しの状況を考えると、染であろう。

馬具残欠

一連の馬具類のほかに「馬具残欠」と称される一群の貴重な宝物がある。『資料』によると「このほかに十組の馬具のいずれに属するか不明の障泥あおりや杏葉などが馬具残欠として伝わる。障泥は馬腹を覆うように左右に付け、跳ね上がる泥、馬の汗などから衣服の裾が汚れるのを防ぐもので、常時用いず、悪天候の際に使用したとされる。表は毛皮、裏は布貼り黒漆塗とする。表の獣毛は脱落しており、熊毛皮の説もあるが、確かなことはわからない。対となる二枚のそれぞれの裏に「甲」「乙」「丙」「丁」「中」と白色で文字が書かれている。なお、ここに述べた馬鞍と馬具残欠は納入された経緯が定かでない。また、大破していたものもあり、昭和四十年代に修理が加えられた。」と記している。

また、第58回展示目録によるとく〈『延喜式』「彈正台」には、熊皮の障泥は五位

以上がうけるべきものと規定されている。一方、宝庫に伝わる十組の馬鞍は、鞍橋に加飾を施さない簡素な作りであることや、馬鞍に付属するアザラシ製の鞆は六位以下が付けるものであることなどを勘案すると、五位以上の高級官人が用いたとは考えにくい。よって、これらの障泥は、別の鞍に附属していたものと考えられるべきだろう。〉と述べている。

障泥〈あおり〉「丁」

資料：左・右 長71.0 幅60.0 皮製 裏は麻布貼黒漆

[調査の結果]

裏面は皮革・麻布・漆塗となっている。裏面にも毛穴が認められ貫通していることが分かる。毛穴は3穴や2穴並びが多く、特に3穴が多い。太毛1本に複数の細毛が散り巻いている。全体に長毛であることから、熊の毛皮と判断された。表は茶色で、毛は下方に下がっている。背筋を取り込んだ裁断ではないようだ。下側の左方に革の切り口が認められる。昭和9年の図録では熊の毛皮とされている。加工された当時は毛皮としての加工処理をされていたものと推察する。年月の経過に伴い、生皮きがわのような状態になり、硬くなったものと考えられる。

裂には漆がなく、革の厚さは0.6、0.7mm、布の厚さは0.8、0.9、1.1mmであった。この皮の薄さが驚異的である。



馬具障泥「丁」（平成18年正倉院展図録より）

障泥「中」

資料：左・右 長70.0 幅60.0 皮製 裏
は麻布貼黒漆

[調査の結果]

材質は熊の毛皮である。前項「丁」と同様の観察結果であった。ただし、これは背筋部分が障泥の中心を走っているが、毛流の均一性から見て採取場所は尻部付近ではないと思われる。残欠の上部に左右対称の位置に傷穴が残っており、人工的な傷に見える。また、3穴並びが多くあり、毛穴はかなり大きく見えるが、使用とか時間経過の中での変化と考えられる。

この障泥の毛と見られるものが紙包みとして残っている。

障泥 残片「甲」

資料：障泥の最大のもの 長69.3 幅55

[調査の結果]

熊の毛皮である。小さな切れになった残片であるが、調査のためには好都合な小片であった。薄いもの、厚いもの、大きいもの、小さいものが混在している。薄い小片では一穴に2本、3本の毛が随所に見える。厚い小片については表面の残毛、毛の貫通や裏張りの麻布の付着等が観察された。

障泥 「乙」

資料：左・右 長68.5 幅55.0 皮製 裏
は麻布貼黒漆

[調査の結果]

障泥「丁」と同様の皮と考えられる。全面にわたって所々に残毛が見られる。毛根も裏面から認められる。熊毛皮である。厚さは麻も含めて2.1mm、皮は部位によって1.2、1.3、1.4、1.8mmと測定された。

以上が馬具の皮革に関する調査の記録である。ここで若干言及したいことは、鹿革

の着色が燻しによる染色かどうかの問題である。今まででもこれらを燻し革であるとは明言しない文献がいくらか見られるが、しかし、全体としては従来から宝物の鞍褥や屨脊の染色技法は燻しによるものというのが長年の、いわば定説とされてきた感がある。従って、今回の私ども調査チームの「鞍褥や屨脊の染が燻しではない」という報告は、実は皮革技術史の面では衝撃的なことなのである。予感はしていたことではあるが、研究者の反応が早速に出てきた。

鞍褥の染色技法と観察調査

皮革史に詳しい永瀬康博氏が最近研究論文『正倉院の鞍褥と熏』（御影史学論集第32号所収、平成19年12月23日刊）を発表した。多くの燻し説を紹介し、次いで著者の報告書、及び西川明彦氏の論文などの否定説を紹介している。燻しに絞って考察した研究は大変貴重で、その労に敬意を表したい。ここでは詳細なことを述べることはできないが、調査結果を踏まえつつ燻しの技法であるとする永瀬説に若干の意見を述べてみたい。

永瀬氏は「(三) 文様のあり方」の項で「ここで重要なことは文様の白い線が凹んでいることである。これに対して地の熏の部分凸になっていることである。」と述べ、「(四) 表面の状況」の部分では「文様は白抜きにしている。」として、色相について述べている。そして、後段部分において「文様が凹になるのは文様部分に力を加えて凹のままで文様を定着させる必要があるのである。この圧着する技術が鞍褥の鹿革に用いられたのである。」と論考している。

(以下次号)